

## 福島県天王山遺蹟の弥生式土器

——東日本弥生式文化の性格——

坪 井 清 足

弥生式土器が農耕文化の所産であつたという事は既に一般の常識となつてゐる。ところが土器についた粗あとがに最初発見された東北地方の弥生式土器研究は、その後研究の重点が西日本に移行したのに伴つていつしか等閑に附され、現在なお究明されねばならぬ幾多の問題を残している。その中で、東日本弥生式土器、或はかつて接触式土器とよばれていた縄文のある弥生式土器の示す性格について、具体的に天王山遺蹟のそれを取扱うことによつて考えてみたい。

### I

天王山遺蹟は福島県白河市久田野にある。奥羽街道の白河の関近くにあたり、現在東北本線白河駅から東へ約二軒、白河盆地の略々中央部に孤立した丘陵の上にあつて、西南に那須火山群を仰ぎ、南に阿武隈川の流れをのぞんで海拔四〇七m、盆地の平垣部からの比高約八〇mの地点にある。

この遺蹟が発見されたのは、昭和二十五年二月、開鑿によつて土器片の採集を見たのが端緒で、当時白河農業高校の藤田定市氏の手で遺物の蒐集、及び現地の調査がなされ、その後、同市の郷土史家岩越二郎氏の援助を得て研究発表<sup>①</sup>されたものである。本年初頭に至り、はからずも日本考古学協会弥生式特別委員会の仕事の一端として、かねてから興味深く思つていた此の遺蹟の弥生式土器を実測する機会を与えられた。

遺蹟の状態については、既に藤田氏によつて公表されているものに、このたび聞き得た事を加えて概略を記すに留める。

遺蹟は天王山（俗称）の頂上、三反歩程のほぼ平坦な地域一帯で、ほぼ三角形を呈し、丘陵は東側に相当急な傾斜を有し、南・西にやや緩い傾斜でひろがつている。

発掘は二回に亙つて行われた。第一回の調査は即ち発見後数ヶ月

を費して行われた。部分的にはあるが土器が群在した処があつたのを、各々AからRまでの地点記号をつけている。第二回目の調査は同二十五年十一月に、福島県教育委員会と協同して行われたもので、丘頂の三角形の各辺に平行に三本のトレンチを掘つて各々A、B、Cトレンチと名付けた。

現在蒐集されている遺物は第一回の発掘による弥生式土器が大部分である。其他には相当量の米、粟等の植物性遺物や、若干の土製紡錘車、玉器、石器が発掘されている。

これらの遺物が包含されているのは、全般に現地地表下五〇―六〇cmの厚さの腐蝕土下部と、それに続く粘土層との境目であつて、大小の土器が粘土層上に直立し、或は横倒しの恰好で、焼土や木灰の固り等と一緒に発見されたという。このように明らかに人間が火を焚いたあとと思われる状態があるにも拘らず、第二回の発掘に際し遺蹟の南端に近い部分で発見された爐址の他には、明確な住居地の範圍を示すものは今迄の処見出されていない。ただ粘土層上至る処無秩序に、径一m―数cmの穴がうがたれている。かかる状態から推して、此の遺蹟を或ひは大和の唐古、常陸の女方などに見られるものと同様な貯蔵庫であつたのではないかと考へる向きもあつたし、或は又、藤田氏などは遺蹟の占める位置に着目して祭祀遺蹟説を唱えて居られた様であるが、何れも肯定し難い。何故なら遺蹟全般の

状態、即ち、爐址をはじめ、散在する明らかかな焚火のあとや、そのすぐ傍らにA、H、M各地点の如く数箇の土器が列をなして置かれているという状態を考え合わせれば、貯蔵庫とも祭祀遺蹟とも認めにくく、やはり一般的な集落が営まれていたと考へる方が、より妥当ではないかと思ふ。

## II

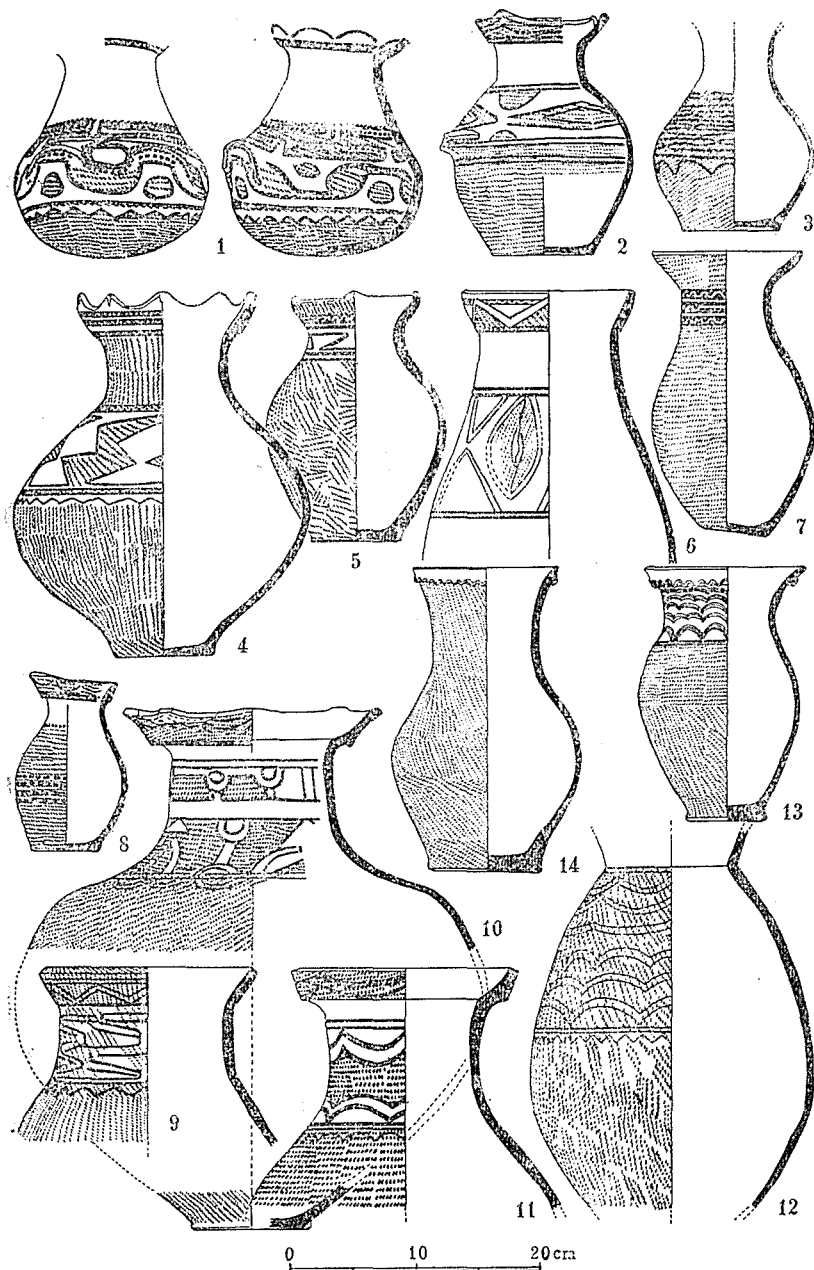
本節では前述の様な状態で出土した土器について述べる。本遺蹟発見の土器は全て弥生式土器で、以下器形、文様等に分けて説明しよう。

### A、器形

先ず器形としては壺形土器と、甕形土器、小形鉢形土器(第三〇3)および高環形土器(第四〇34―37)に大別出来る。

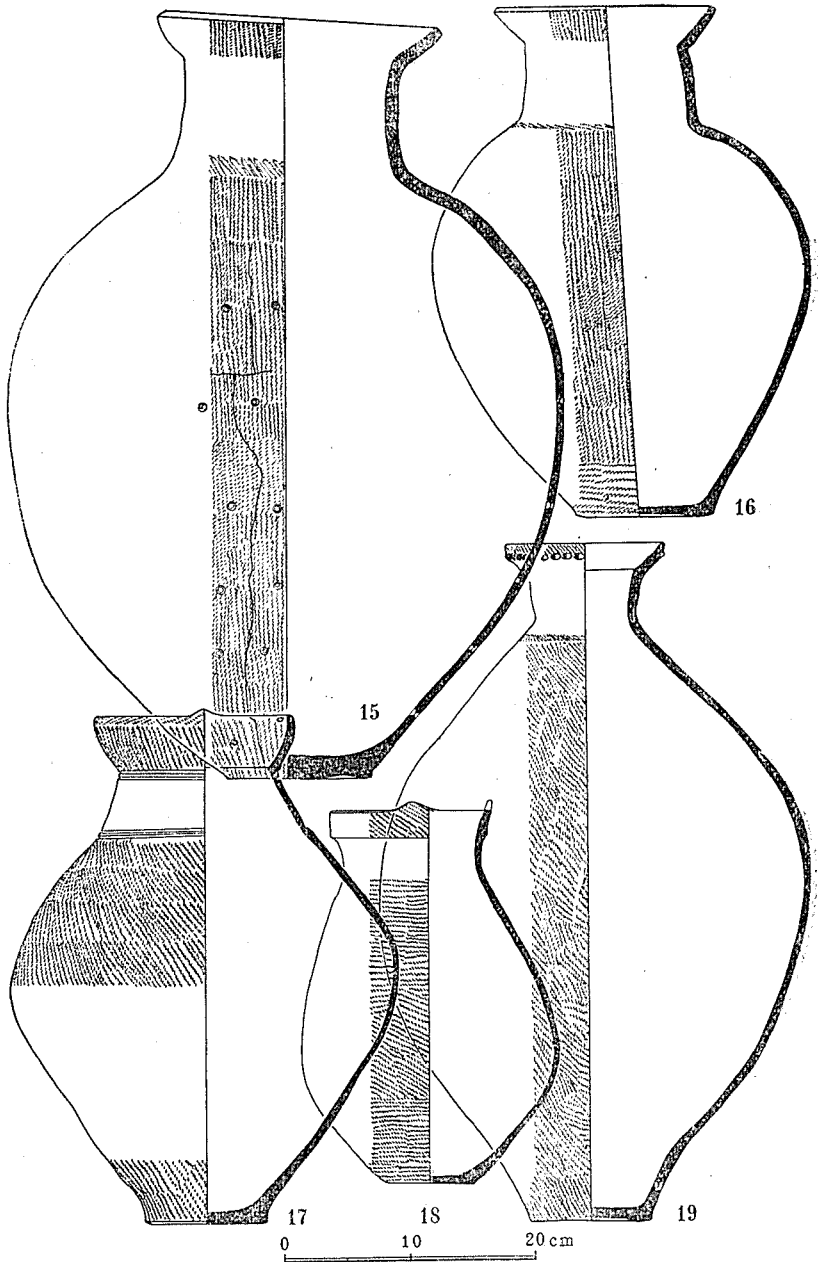
その内壺形土器は更に裝飾の豊かな壺形土器(a)(第一〇3―14)と、裝飾の少い通常大形の壺形土器(b)(第二〇15―19)および注口土器(c)(第一〇1・2)とに分けられ、同様甕形土器も亦裝飾の豊富なもの(d)(第三〇20―30)と縄文のみのもの(e)(第三〇31・32)とに区別される。

壺形土器に通じた特色は、何れも明確な円筒形に近い頸部と、その上に外反した厚い口縁部をもつこと——(1・14)は例外的なもの——である。口縁部には山形突起が好んで用いられるが、その数は



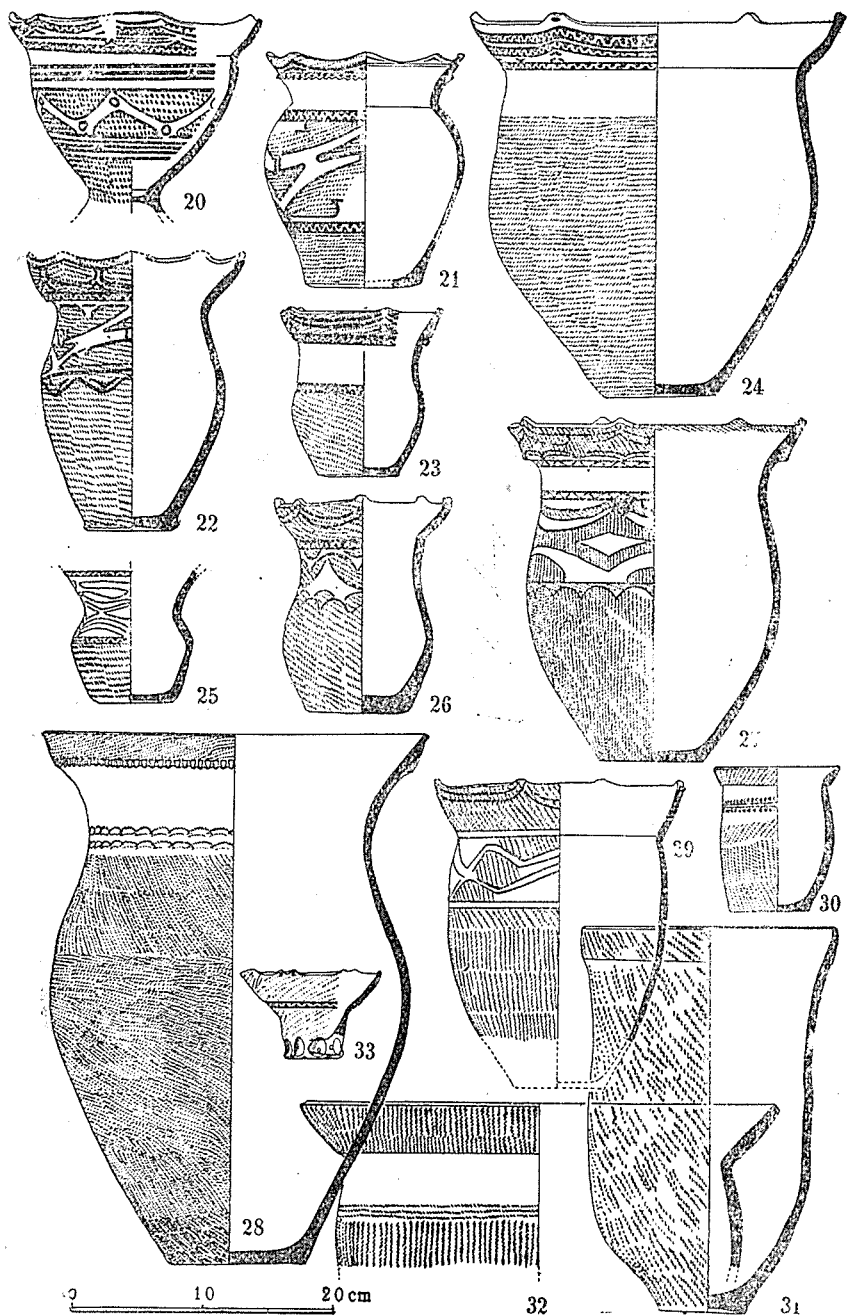
第一圖 天王山出土壺形土器 (1)

福島県天王山遺蹟の弥生式土器（坪井）

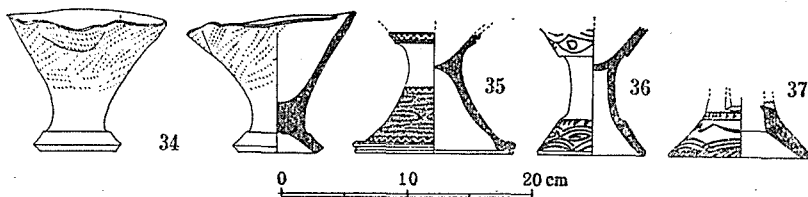


五三

第二圖 天王山出土壺形土器 (2)



第三圖 天王山出土甕形土器



第四図 天王山出土高坏形土器

一箇のものから10の様に七箇以上と考えられるものまで種々あり、奇数である事が多い。中には、土器の正面を意識して不均等に配列させた例(2)も見られる。

小形のものには口縁部の一方を片口状に作つた例(8)も二・三発見されている。

胴部は球状に近いもの(3・4)もあるが卵形に近いものが一般的である。底部はやや上底になつた安定した平底が普通で、例外的には糸底風になつたもの(3)や、丸底のもの(1)も見られる。底部には往々木葉の圧痕が見られ、縄文の施されたもの(38)や、布目底も各一例知られている。<sup>④</sup>

注口土器(9)は、丸底で巾着形の器形を持つもの(1)と、通有の壺形土器に注口をつけたもの(2)の二例がある。何れも胴部に注口——現在は欠損していて完形を知り得ないが、他遺蹟の例から見ると余り長かつたとは思えない——を有し、

注口の左右に帯状の突帯部を持つている。

壺形土器(d)の多くは肥厚させ、且外反した明確な口縁部を持つている。大口壺形土器様のもの(25・26)もあるが、23との関連から此類に含ましめた。口縁部は一般に数箇以上の突起を持つが、平坦な口縁の土器(28)も皆無ではない。20は五箇の山形突起の外に一箇の片口状の突起を有し、同様のものが他にも二・三例見られる。底部は壺形土器と同様、上底風の平底であるが、台付壺形土器であつた事を示すもの(20)もある。

甕形土器(e)の器形は至つて単純で、口縁を僅かに肥厚させたと覺しきもの(31)や、口縁がく字形に外反したもの(32)等あるが、此類は完形を知り得るものが少い。

小型鉢形土器(f)は大きく外反した口縁を持つ土器で、二個ずつ対になつた四箇の山形突起の外に一箇所大きく片口状に作られた部分を持つている。胴部下端には指痕の凹所をめぐらし、その凹部に二孔一對の孔が底面に向けて斜にちがたれている。

高坏形土器(g)は、円筒形の脚部に朝顔型に開いた脚端部を有し、坏部は漏斗状に作られていたものと思われる。坏部の判明する三例とも口縁の一方が片口状に作られているのが特色である。脚部にすかしのあるもの(37)も一例見られた。完全に遺つていないのは小型の一例(34)のみであるが、何れも脚部に比して坏部が大きかつた

ものと考えられる。

B 文 様

本遺蹟の土器の文様を最も特徴づけるものは、二本の沈線で区切つた間を、上下より交互に刺突して作つた波状帯文——以下刺突波状文と呼ぶ——で、各種器形の口縁部下端の裝飾に最も多く（1・4—6・8・10・20—23・33）、口縁外側の主文として（4・6・20・24）、或は胴部文様の上下の界帯文として（4・12・25）も用いられている。

壺形土器(a)、及び注口土器(c)には口縁部の外に頸部に主文のあるもの（5・7・9—11・13）と肩部に施文のあるもの（2—4・6・12）がある。口縁部の文様としては、山形突起のカーブに沿つた上向きの連続弧線文（2・10）、或はジグザグ文（6・9）等が見られるが、口縁下端に刻目をつけただけの簡単なもの（13・14）もある。胴部は刺突波状文だけの例（7）もあるが、一般には上下に設けた界線を基底として、半円或は三角文を連続的に対置させ（2・6・11）、文様間の空間に菱形、又は杏仁形を入れたもの（2・6）や、上下の界帯の間に電光形の文様を同方向に置いたもの（4）、更には縄文式晩期の所謂工字文類似の文様を配したもの（3）等がある。通じて篋描と磨唐縄文が好んで用いられているようである。胴部文様帯の下端はジグザグ或は連続弧線文で飾る事が多い（1・

3・4・9—12）。

以上の外に、太い篋描沈線に刺突文を加えて鋤齒状にした線⑤や小さな竹管文列を用いたもの（1）が見られる。半截竹管による連続弧文を重列に列べたもの（12）や櫛描きで重列連続弧文を現わしているもの（13）等は、何れも本遺蹟としては例外的な文様である。大型壺形土器(b)では頸部以外の全面に縄文を施しただけのものが多いが、縄文の廻転方向を変える事によつて裝飾に変化を与えたものが見られる。17は頸部に二段、二本づつ沈線をめぐらし、19では口縁下端に刺突文列を有つている。

壺形土器(d)は壺形土器(a)と同じく豊富な裝飾を持つ土器である。

口縁部は壺形土器と同じ方法で施文されているが、胴上半部の文様には少しく異つた点が見られる。即ち、壺形土器(a)と同一原理の対置文様をもつもの（25・27）これらの退化形と考へ得るもの（29）等があるが、一方では上下の三角文を互違に置いて中間の空間が波状文の様に作られているものがある（20—22）。又文様帯下端には(a)と同手法の弧文、波状文を用いたもの（22・26・27）も見られる。

殊に注目されるものは20に見られる胴部上下の界帯文で、大洞A式に現われる文様と全く同様である。しかも此の土器の口縁部に施された文様と前述の界帯文との類似から考へれば、一般に口縁部山形突起の下に屢々見られる△形文は、此の大洞A式文様の退化形では

ないかと思われる。胴上部に二列の結繩文を持ったもの(28)も見受ける。

型形土器(e)は大型壺形土器(f)と同様、施文は繩文のみである。

高坏形土器(g)の坏部には、半截竹管による不整形な裝飾が施され、脚部は上下に刺突波状文の界帯をもち、その間を繩文地に工字文風の文様を置いたもの(35)と、弧文を組合せたもの(36・37)等が見られる。

以上の他太い篋描線を用いたもの(1・3・5・9・11・21・22・26等)、細い篋描線を用いたもの(2・6・25・27・29等)、少数の半截竹管文を持ったもの(12・30等)等があり、或は又櫛描文も一例(13)存在する。この事実の示す意味については後に触れる事

にしたい。

さて以上で大体文様についての説明は尽きるが、此処にもう一つ繩文の施文法について附加して置きたい。

本遺蹟の土器は高坏脚部二片を除いて、他の全てに繩文が印せられてゐる。しかもその繩文は、普通の斜繩文よりも、縦或は横に走るものが多く(縦4・9・15・27・29・32等、横1・2・7・8・10・11・13・20・25等)、斜繩文でも斜に帯状に走るものが見られる(12等)。こうした施文法の特徴即ち、どの様な繩文原体を用い、どの様に土器面に廻転させたかをしらべてみると、次の如くである。左に示す表は佐原真君の調査によつたもので、山内清男氏の繩文の記載法を用いてゐる。<sup>⑦</sup>

地点名	土器番号	繩文の廻転方向	備考
A	16	RLorRRL縦↗横↘	
	23	LR↗etc	
B	29	RL縦↗斜↘	
C	4	RRL縦↗斜↘	
	24	LLR(or LR)↗	
F	13	R	
G	7	LR or LLR↗	朱塗
	10	LRorLLR横↗斜↘	
G-H	12	RLorRRL縦↗斜↘	朱塗
	20	LR or LLR↗	
	33	LR or LLR↗?	
H	11	LR↗?	
	8	RL↗or LR↘	
	9	RL↗&↘	
	15	RL↗&↘	
I	19	RRL↘	朱塗
	1	RL or RRL ↘	
	3	LR or LLR↘ or ↗	
J	21	LR or LLR↘↗	
	30	LR↘↗	
	36	ナシ	
	31	RL or RRL↘	
L	34	LR↘?	朱塗
	35	ナシ	
	37	ナシ	
	18	RLorRRL↘&↗?	
M	2	RL or RRL ↘	
	5	RLを多方向に廻転	
	14	R↗or ↘	
	17	RRL or RL↘	
N	6	RL↘&↗	
P	27	RL↘&↗	
Q	28	胴R↗下部RLorRRL↘	
	25	LR縦↗横↘	
A'トレンチ附近	22	LR or LLR↘	
	26	LLR斜↗横↘	
不明	32	RLorRRL縦↗横↘	
但し		繩文原体 廻転方向 ↗ ↘	燃糸文



別表に示される通り、本遺蹟で用いられている縄文は、繩の撚り方が右撚り（R）と左撚り（L）がほぼ四対六の比で見出される。

—— 撚りの方向の判明する39例中59%はRL、41%はLR——その上各地点とも両様の撚り方が混在し、僅かにH地点のみがRLのみを用いている様に見えるが、これとてもH地点出土品の全てを檢討した訳でないから断言出来ない。この様なことは羽状縄文を用いる時期以前には珍らしい。

### III

土器以外の遺物としては玉製品、石器類、土製品が採集されているので、簡単にふれて置きたい。

玉製品では碧玉製の管玉が一個ある。完形ではないが直径0.8cm現存長さ1.9cmのものである。石器として注目される一つに、環状石斧がある。半ば缺失しているが復原径12.4cm厚さ2.9cm孔径2.9cm片面の孔の周囲に帯状隆起をめぐらしている。閃緑岩系統の石であると思われる。数的に最も多いものはアメリカ式鐵と言われる特殊な柄を持つ打製石鐵である。土製品としては紡錘車が2個採集されている。何れも紡錘車として特に作つたもので、一つは片面に刺突文の環圍をめぐらしている。径5.2cm厚さ1.9cm。一つは半を缺き表裏に刺突文を持つている。

以上の中で管玉の出土は最近大変例がふえたが環状石斧の伴出は

珍らしくアメリカ式石鐵もこの様に多数採集された事は余り例を見ないものである\*。

### IV

以上の様な天王山遺蹟の遺物の示す処については、種々の問題が含まれているが、先ず始めに、天王山の土器が、一見縄文式土器に近い様相を示している点から考へて見たい。

天王山出土の土器の中で、西日本の弥生式土器を見なれた目に奇異に感じられることが二・三ある。その一つは甕形土器(d)とした一群の土器(20—21)で、出土量の最も多い器形である。器形としては甕形であり乍ら、弥生式土器に於ける一般的な原則を破つて、豊かな裝飾が施されている。しかもこれらの多くが明らかに火にかけて用ひた痕跡を残していることである。尤も火にかけたと言つても、粗製甕形土器(e)のひどい焦つきに比べれば、煤け方は少いが、中には23・24・29の様に内面に有機物が焦げ付いている例も見られる。処が、更に甕形土器(d)と同じ様に煤けたものに、壺形土器(3・7・18・14)がある。この様な事實は、一般の弥生式土器に示される器形と機能との明瞭な結びつきと対比してみる時、両者の關係が相当ルーズな状態にあることを示していると言えよう。この様な事實は、西日本の古い様式に見る様な器形と機能との固定した關係が薄れ、逆に縄文式時代に於て用いられたブリンシブルに倣つて土器を用い

る風が強く出て来た為ではないかと思われる。何故なら此の様に裝飾をもつた深鉢形土器が火にかけて用いられた例は東北地方縄文式晩期文化の土器<sup>⑩</sup>に多く見られる特徴だからである。

同様な事が片口を持つた土器についても言える。即ち壺形土器(8) 甕形土器(20) 鉢形土器(33) 高坏形土器(34)等の各種の器形を通じて片口が作られているが、片口は機能の上から液体を注ぐ為に作られたと考えられるから、液体を取扱う器形が不定だつたことを意味している。最も極端なのは、高坏の坏部に全て片口がついていることである。これなどは、弥生式的な器形と機能の関係を無視した好例と言えよう。

もう一つ片口土器に關聯して注目されるのは、注口土器Cである。注口土器は元來縄文式土器特有の器形であるが、弥生式土器にもかかる器形が作られる事は、縄文式文化の伝統を伝えるものと解し得るであらう。

この様な縄文式文化の伝統は、東日本弥生式土器全般に見られる現象であるが、器形のみでなく文様の上にも端的に現われ、天王山では特にその傾向が強い。例えば、先にも触れた20に見られる工字文風の文様や、21に見られる口縁突起内面の人形切込、29の口縁突起と弧線文との關係が、23・24の様に弧線文の謎目が突起の中央になくて一方に片寄つている事実等は亀ヶ岡式の裝飾法に類似したも

のである。又3・31等は薄手に作られた土質・焼成等一見亀ヶ岡式の精良な土器を思わすものがある。又壺形土器が一般に円筒形の明瞭な頸部を持つ事は、之又亀ヶ岡式の壺形土器に見る特色を残したものと解されはしないだろうか。

この様に一方では縄文式土器の伝統を豊かに備えているかにも見えるにも拘らず、他方此地に盛行する晩期縄文式土器と比較する時、そこに天王山の土器が明確なる弥生式土器である事を示す幾多の特色が認められる。

第一に東北地方の縄文式晩期の土器に比べて余りにも器形の変化に乏しいことである。亀ヶ岡式(大洞式)の各期に於ては似通つた器形であり乍ら、部分的な変化から分類すると数十種に區別し得るのに較べれば、此処では弥生式土器特有の壺、甕、高坏の原則外に幾らも出ていない。

第二に縄文式晩期の伝統を持つと思われる裝飾が部分的には壓々使用されているにもかかわらず、その裝飾の根底をなすものは、周辺地域に見られる弥生式土器のそれに通ずる事である。即ち東北地方縄文式晩期の特色たる技巧的な裝飾原理と較べれば、いかにも簡素化された弥生式的な雰囲気を感じさせる。

以上のような特質を持つた土器を我々は今後天王山式と呼びたい。<sup>⑩</sup>

天王山式土器は本遺蹟以外に余りその例を知らない。僅かに仙台市南小泉遺蹟出土の二・三の口縁部と、東自河郡棚倉町比丘尼堂遺蹟の一例をそれに比定し得るのみである。とは言え天王山以外での天王山式土器の採集が見られる事は、天王山遺蹟の天王山式土器が特に例外的なその土地だけの土器でない事を示すものと言えよう。

この天王山式と同じく陸前から磐城岩代全域に広く分布する枡形甕式土器<sup>⑩</sup>（越後山草荷とも一連のもの）と天王山式との関係は、枡形甕式の中に多い器形と第3図33の小型鉢形土器が同様のものであること、及び山草荷の甕形土器——「弥生式土器聚成図録」C27、C28、——が甕形土器(d)に類似した文様をもつこと等、何らかの関連を思わせるものがあるが、他には極めて類似点が少く、この点については尚後日の研究に俟たたい。

現在天王山式と最も近縁関係を求め得る土器は上野国吾妻郡岩櫃山の土器である。岩櫃山出土の甕形土器の胴上部に見られる三角連繫文の一例は、天王山の第一図5と近似し、しかも、その器形は明らかに天王山の甕形土器(d)と同系統でありながら口縁部はまだ天王山式の様に発達していない。

これからみると、岩櫃山や、これに類似した常陸女方15号竪穴<sup>⑪</sup>の土器等即野沢式が、条痕を失い且口縁の突起を発達させて、漸次天王山の太い篋描文をもつ土器に移行したのではあるまいか。更に天

王山式の中で、太篋描文から細篋描文に移り、これが半截竹管文、櫛目文に変化しやがて十王台式<sup>⑫</sup>が生み出されたものであろう。

ところが岩櫃山の土器や、女方15号竪穴の土器の特色は、条痕と太篋で描いた磨消縄文で、この様な特徴を持つた土器は北は磐城、岩代から関東一円に分布し、更にこれは中部山地及び尾・三地方に見られる条痕の多い土器と密接な関聯を持つものと考えられる。

#### IV

以上の様な、東日本の弥生式土器に、接触式土器なる名称が附されている。この名は杉原莊介氏によつて提唱されたもので、縄文式文化と弥生式文化との接触によつて生じた文化の土器の意で用いられている<sup>⑬</sup>。

しかし、此処で根本的に指摘したい事は、「接触」の行われるべき縄文式文化と弥生式文化との関係についてである。氏の説によれば、接触式文化は弥生式文化の第二時的な段階、即ち最初に西日本全土に弥生式文化が形成され、その文化圏以東では尚純粹な縄文式文化が併行して榮えていた。やがて、此の二つの文化が接触することによつて生じた文化を接触式と名付ける訳であるが、そもそも弥生式文化は、その発生の段階に於て、既に縄文式文化の伝統を含んでいるものと考えられる。即ち、弥生式という日本独自の文化の発生を促した、大陸文化の波を、最初に受入れたのは外ならぬ九州の

縄文式文化であつたのである。今日弥生式前期の土器に大陸および朝鮮半島の土器とを区別し得る独自性を認めるとすれば、その様な独自性を発生せしめたものこそ九州に於ける縄文式文化の伝統であつたとせざるを得ない。事実遠賀川式と呼ばれる弥生式前期の土器は、壺、甕、高坏という、大陸農耕文化に共通した器形のセットを完成させている点では、浅鉢形磨研土器と、粗鉢深鉢形土器の組合せを有つていた九州の縄文式晩期の土器とは異つてゐるが、他の土質、焼成、成形技術の細部に互つて見る時、明らかに縄文式文化の慣用を踏襲していることがわかる。

遠賀川式土器の分布東限は、先学によつて明らかにされた様に、ほとゝ尾張、三河の線が境界となつてゐるが、所謂東日本弥生式土器も此の線を西の境界としている事は單なる偶然の一致であらうか。

此の境界線の東には、日本の脊稜をなす中部山地が存在する、この山地によつて分けられる東・西の両地域は氣候条件に差異を生じてゐる。即ち現在、この境界線以西の地域は、夏季の氣候条件が北九州地方と殆んど大差ない程度であるのに反して、以東の地域では少くとも2°Cの平均温度差を示し、又日照時間に於ても10—20時間(月平均)の差を示している。これによつて稲の播種、出穂、成熟の時期に平均一箇月の差を生じてゐるのみならず、現在の水稻の感温性品種と感光性品種の分布についてみた場合、西に感光性品種が

宿鳥県天王山遺蹟の弥生式土器(坪井)

卓越し、東に感温性品種が卓越する結果となつて現れてゐる。而して「感光性の高い遣伝子が優性、又感温性の低いものが優性である」ところから、最初感光性の高い感温性の低い品種が輸入され、漸次土地に馴化して感光性の低い、感温性の高い品種に改良されて行つたということが考えられてゐる。この事と弥生式に於ける東西の境界線を考え合せる時、我々は此處に此の境界線の持つ意味を汲み取る事が出来るであらう。弥生式時代と現代とに、地形的に極端な変化が考えられない以上氣候条件も根本的には變つていないとすれば、北九州に入つた稲作技術は、氣候条件の似通つた此の境界線以西の地には短時日の中に浸透し得たが、以東に及ぶまでにはまずその稲そのものの馴化を必要とし、それに或る一定の時間を要したであらうことは想像に難くない。その結果、土器の分布に前述の様な境界線が出来たと考えられる。

一方此の時境界線以東の地域は、縄文式晩期に於て最も華麗、繁雑な土器をもつ所謂亀ヶ岡式文化の影響下にあつた。農耕文化を取り入れた西日本とは、逆にその生物地理的環境が縄文式晩期文化の發展により適していた事を物語つてゐる。此の点に就いては、山内清男氏の説かれる「貯蔵食品としての鮭、鱈が遡上する河川の南限と、亀ヶ岡式の卓越地域との関連」等は生物地理学的な観点に立つて一示唆を与えてゐるものといえよう。

即ち弥生式文化自体の制約と共に、縄文式文化の二次的な抵抗が此の線に於て現われていると見るべきである。

やがてこの制約や、抵抗を乗り越えて、更に東に稲を持った弥生式文化が伝播した時に、其処に出来た土器は、西日本の弥生式土器と対称的な外見——磨消縄文と条痕を持った土器——として出現したのであつた。それが北関東・東北地方南部の野沢式であり、これより発生したものとして此処に報告した天王山式が見られるのであるが、それらを遠賀川式土器と比較する時、著しく地方的色彩を強く感ずるのである。此の差異は、東日本への馴化を示すと共に、東日本弥生式文化が遠賀川式と並行するものでなくて、遠賀川式を繼いで各地に起つた所の、より地方性の濃厚な文化と同時性をもつものであつたことを想起すれば、正当に理解されるものであろう。

- ① 藤田定市『天王山遺跡の出土品について』昭和25・11・23  
藤田定市『天王山遺跡の調査報告』昭和26・1・15
- ② 藤田定市『天王山式土器の紋様図集』昭和26・10・28  
唐古、女方等の他に東日本において同様の遺跡が多数見出されるが、共通した特徴は直径一—二mの範囲内から壺形土器のみが発見されることであらう。
- ③ 壺形土器の口縁を明確に片口状に作つたものは松本市城山遺跡の例が挙げられる（松本博物館蔵—昭和十八年実測）
- ④ 弥生式土器の布目底は近江、尾張地方の古式桶目土器を西限

として、東日本弥生式土器の一つのメルクマールとなし得るものとされている。

- ⑤ 三角沈刻文とか沈刻列点文と言われる縄文式土器五領台式と同様な手法である。

藤森榮一『信濃諏訪町踊場の土器』

人類学雑誌49—10、昭和9。10

江坂輝弥「相模五領ヶ台貝塚調査報告」考古学集刊 第三冊、昭和24・11

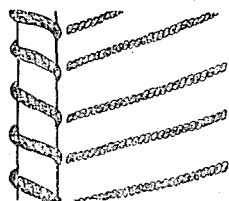
- ⑥ 愛知県瓜郷下層の縄文を持つ朱塗土器の文様と同様のものである。

- ⑦ 山内清男氏による縄文の施文法は第五図の如くである。

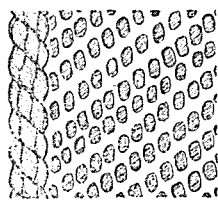
- ⑧ この様な環状隆起を持つ環状石斧については八幡一郎『環状石斧』考古学 1—2、昭和5・3

- ⑨ これら亀ヶ岡式の細分としての大洞式の編年的研究については山内清男氏の教示を得たが、もし事実と反する点があるならば筆者の誤解である。

- ⑩ 弥生式壺形土器の注口を有するものは現在七例知られている。彦坂原ノ

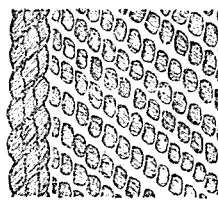


R →



RL →

第五図 縄文の模式図



RL →

辻、肥後高木原、信濃丸山各一例、信濃栗林二例、天王山二例である。水野清一『鬼が島・壱岐の考古調査』科学朝日12—2号、昭二七・二、戸沢充則『阿谷市丸山の弥生式土器』諏訪考古学5。等参照

⑪ 天王山式の名称は藤田氏の他に伊東信雄氏によつても用いられている。

⑫ 伊東信雄『東北地方の弥生式文化』文化 2—4、昭25・10

南小泉遺蹟出土品については松本源吉氏蒐集品の写真、棚倉遺蹟のものは杉原氏拓本によつた。

⑬ 山内清男氏によれば榊形囲式と南小泉とは厳密には異るとの事であるが、共通点も又多く、ここでは更に広い意味に解して南御山の主体をなす土器、山草荷の土器をも土質、焼成、施文等から一括して榊形囲式のバリエーションとして扱つた。

⑭ 杉原氏資料による。なお岩櫃山については、長田実『上州岩櫃山岩窟遺跡発掘記』考古学 11—2、昭15・2

⑮ 田中国男『弥生式縄文式・接触文化の研究』昭19・3

⑯ 十王台式に關しては山内清男『先史土器図譜』第一部第一輯昭14・7参照。なお十王台式と杉原氏の二軒屋式とは近似せるものである。

⑰ 杉原荘介『原史学序論』昭和十八年版に「弥生式文化の東漸と接触文化の形成」なる一節が見られるが、昭和二十一年版は改訂され、この論が更に展開されているから、本論では後者によつた。

⑱ 松尾孝嶺『日本の稲』昭28・1

⑲ 山内清男氏の日本考古学協会昭24年秋総会講演による。

⑳ 縄文式時代後期及び晩期を通じて各地を遍観する時、その装飾の根本を貫くものとして、九州に於ては縄文を施す事の稀な直線的装飾と、装飾の稀少性が挙げられ、之に対比される東北地方は縄文をふんだんに用いた曲線的装飾と、且豊富な装飾性が挙げられるであろう。この様な根本的性が弥生式文化に受けつがれ、地域性を各地で発揮しはじめると、九州に発生したものは須玖式という、突帯を一、二条めぐらす以外の殆んど装飾を持たないものとなり、近畿地方に於ては両者の中間的な穂目文の盛行が見られ、東日本では曲線的な文様に、伝統の強い縄文を配した東日本弥生式土器として現われるのである。

\* 本稿提出後日本考古学協会第十一回総会で伊東信雄氏より、アメリカ式石鏡は榊形囲式に伴つて各地で出土しているとの教示をえた。